自立できる社会を

〈座談会〉障害者と市長が語る

新潟市では、全国にさきがけて、障害者とボランティアの人たちが心の輪を広げようと「身障者レクリエーション講習会」が開かれました。(車イスダンスから)

完全参加と平等　'81国際障害者年

今年は、「完全参加と平等」をめざす「国際障害者年」です。

県内には約83,000人、市内ではおよそ14,000人の障害を持った人たちがいます。

そこで今回は、障害にもめげず社会の第一線で活躍している人たちと市長が、①自立までの苦労と喜び②アドバイス③将来への抱負—などを気軽に語り合ってもらいました。

出席者

佐藤　雅昭さん(28歳　大平4)
体幹不自由で、歩行補助杖を使用して歩行可能。写真の現像、焼付などの技術を習得。写真店を開業して8年。昭和50年運転免許証を取得し、身体障害者用自動車で営業を行っている。

中尾　太一さん(27歳　紫竹)
視覚障害で、昭和48年盲学校卒業後、ハリ、キュウ、マッサージ業を営む。自営で開業して5年。点訳技術に優れ、点字の電話帳を製作。現在、点字の生活便利帳を製作中。

箱岩　佳子さん(22歳　小金町)
聴覚障害で、昭和51年ろう学校卒業後、神奈川県身体障害者職業訓練校で、機械製図を勉強。昭和52年以後就職難を体験。今年4月、製図の技術を生かせる設計会社に就職。張り切って仕事に当たっている。

鈴木　ミチさん(52歳　米山)
主婦。子供さん(19歳)が、血液不適合による心身障害者。新大付属養護学校高等部を卒業後、今年春、日和山作業所に入所。現在は作業所で縫いぐるみなどの軽作業を通して指導を受けている。

山田　和子さん(司会)(寺裏通2)
ボランティア。喫茶店を経営。全国婦人ボランティア研究集会に参加。NHKラジオ「朝の随想」に出演中。

川上喜八郎(市長)
手話通訳　**久保田裕子**さん(田中町)

声が出るまで毎日練習　箱岩さん
免許取るまで苦労　佐藤さん

山田　最初に皆さん、それぞれ職業を持ってがんばっているわけですが、これまでに人に言えない苦労もたくさんあったと思います。箱岩さん声が出るまで苦労したでしょ。

箱岩　小さいとき、母が絵を見せて私に言わせるんです。そうして、毎日練習して声がうまくなった、と母が言っています。

山田　じゃあ、お母さんが大事な先生?

箱岩　はい、そうです。

山田　佐藤さん、車の免許を取るまで苦労したでしょ。

佐藤　県警の方で、私の障害では前例がない、と言われましてね。なかなか理解してもらえなかった。首がゆれますんでね。前、見てないんじゃないかと。私にすれば、見えるからまっすぐ進めるんです、と言うんですが、なかなかわかってもらえない。

車もいいけど、冬の配達はいやですね。雨が降ろうが雪が降ろうがどんなことをしても行かなければならない。泥んこになってチェーン巻いて。

市長　商売というのは、そう楽なものはないよ。

山田　自立なさったときはうれしかったでしょ。

佐藤　うれしかったと言うよりも、苦しいと言った方がいいのではないでしょうか。商売すると、例え体が不自由でも関係ないですからね。

市長　それは、そうだ。人の甘えに期待してはいけないしね。

佐藤　だから営業形態は、電話があればそこまで私が取りに行く、例えフィルム一本、写真一枚でも…。競争の中で生きていくには、サービスしかないですから。

山田　じゃあ、一番うれしかったこと、今年の五月に結婚なさったと聞いたわ。

市長　それはおめでとう、よかったですね。

佐藤　今まで念願としていたいい伴侶を持てたということは最高の喜びです。

山田　中尾さん、一番うれしかったことは…。

中尾　自分の店が持てたということ。これからの、ハリ、キュウ、マッサージの仕事は、近代的な経営をするとなると、治療室を構えて、きれいな所で気持ちよくマッサージを受けていただく。まあ、かなりお金をかけましたが、自分の満足のいく店が持てた、と思っています。

山田　結婚なさったときもうれしかったでしょ。

中尾　私は職場結婚なんです。治療院で知り合い、妻も免許を持っていますし、二人でやっていこうと思っています。結婚して四年になりますが、まだ未完成な人間のようで子供がいないのが残念です。(笑い)

山田　箱岩さんはどう。

箱岩　六月の末頃、新しい車がきたことです。

山田　仕事が決まったことよりもうれしかった?

箱岩　はい。(笑い)

山田　どこかドライブに行きましたか?

箱岩　まだですが、夏になったら軽井沢にドライブに行こうと思っています。

山田　鈴木さん、お子さんが今年から日和山作業所に入ってほっとしました?

鈴木　はい。まあなんとか。三月に卒業して、四月からすぐ仕事に就かせていただきました。毎日喜んではりきって行っています。

市長　養護学校高等部を卒業されているわけですから、日常の生活訓練はきちっとできるわけですね。

国際障害者年のシンボルマーク

国際障害者年のシンボルマークは、二人の人間が連帯して手をとり合い、平等の立場から支え合っている姿を表現しており、「平等・希望・支援」を表しています。周囲の葉は、国連の紋章の一部です。

差別することなく自然にとけこんで　市長
親や近所の人の理解が大切　鈴木さん

鈴木　はい。初め明生園の方へと言われたんですが、教育委員会にお願いして特殊学級に入れてもらいました。施設というよりも、やっぱり学校教育というんですか、勉強を覚えるよりも、まず集団で人様と一緒に行動することができないと世の中に出たとき困るんじゃないかと思いまして…。許可をいただいた時は感激しました。

私の家ではどこへ行くにも家族全員で出かけます。下の子もお兄ちゃんの障害を気にしていませんしねえ。友達が来ても仲良く遊んでいますし、お母さんが理解があるみたいで…。

市長　私はよく言うんですよ。障害者年といったって特別なものではないはずだと。ちょうど世の中に年寄りもいれば子供もいる、男もいるし女もいる、そこに体の不自由な人もいるんだし、別に差をつけて分ける必要は何にもないんで…。だから自然にそれが世の中なんだ、とみんなが考えればいいじゃないんですか、とね。鈴木さんのお話の中で、下のお子さんの友達が来ても、そこで一緒に遊んでいる、そういう世界がどこまでも広がっていけば、私は本当にいい世の中だと思うんですよね。

鈴木　親の考え方もあると思うんですよね。私の近所の方は理解があって、よく面倒みてくれます。"あいさつ"だけは、きちんとしているみたいです。近所のおじいちゃんが、朝、"いってらっしゃい"と声をかけてくださいますし、本当に助かっています。

山田　大事なことですね。本当にごく自然にとけこんでいる。

市長　そこから始まるんじゃないんですか、そう思うんです。無理して一緒にとけこもうとするんじゃなくて、自然にとけこんでくる。それがすべての始まりで、そこから中尾さんであれば目が不自由だから、例えば段差を切り下げなければならない。これは普通の人だって特に年取った人などは、歩道の段差は気になるんですよね。段差を切り下げてくれればありがたいわけです。だから、あれは決して目の不自由な人のために切り下げているんじゃない、という考え方をみんなが持てばいいわけなんでねえ。

山田　そうですよね。同じ造る道であれば全部の人が通れる道であればいいわけですからねえ。

市長　だから障害者年だといって、そんなにキバるよりも、むしろ自然流にいけばいいんじゃないかと思うんです。あんまりキバるとすぐ息ぎれしちゃう。

縫いぐるみを製作中(日和山作業所で)

小さいうちにしっかりと　鈴木さん
後輩に道を開いてやりたいなあ…　箱岩さん

山田　同じ障害を持つ後輩にアドバイスはありますか。

佐藤　私も以前六年間車イスに乗っていましたが、歩道の化粧ブロックがすべり困りました。

市長　キザミを入れさせたりしたんだけどねえ。具体的に検討させましょう。

山田　箱岩さん、町を歩いて困ることない?

箱岩　町を歩いても大丈夫だけど、道を聞かれると困ります。言葉がはっきりしない人だと、"他の人に聞いてください"と言うと、イヤな顔をされるんです。

山田　箱岩さん、ほめられて一生懸命はげみになったことがあるでしょう。

箱岩　私の友だちが、私が設計をやることは後輩のためにいいから"がんばりなさいよ"と言われ、うれしかったです。耳が聞こえないってことは仕事も限られますね。和裁とか印刷とか、手でやるものばかりでしょう。設計はなかなか難しかったけど、今はよかったと思っています。後輩に道を開いてやりたいなあ、と思います。

山田　もっとアドバイスない。

箱岩　耳の聞こえない人は、普通の人に甘えているような気がするんですよね。今、手話通訳に頼めば何んでもしてくれるという考えがあるんです。そういう考えを変えてもらいたいと、いつも言っているんですが難しい。

山田　鈴木さん、お宅のような子供さんを持たれた方に何かアドバイスすることは…。

鈴木　養護学校の小学部のお母さんには、小さいうちにしっかりやっておきなさいよ、と言っています。大きくなってからでは間に合いませんもの。

市長　問題は、これからどういうふうに社会に参加するかですね。

鈴木　訓練すれば何とかなるでしょう、ってことで…。今、作業所に仕事に行っていますが、普通の就職は無理ですんでね。普通の定年の方ぐらいまで仕事に行けるように…。まあ、親がいる限り、親が責任を持って子供の面倒をみますけど、仕事はねえ…。仕事があればいいんですけど。

国際障害者年とは……

一九七六年、国連第三十一回総会で、一九八一年を「国際障害者年」とすることを決議し、障害を持つ人の社会への「完全参加と平等」をテーマとしています。テーマの目的として、次の五つが示されています。

一、障害を持つ人が社会に適応できるよう援助する。
二、障害を持つ人に適切な治療や訓練、指導を行い、適当な雇用の機会を与える。
三、障害を持つ人が、公共の建物や交通機関を利用しやすくするよう調査、研究をする。
四、障害を持つ人が、経済・社会・政治活動に参加し、貢献する権利のあることを一般の人に理解させる。
五、障害の発生を予防し、障害を持つ人のリハビリテーション(社会復帰)をすすめる。

子供に仕事があればねえ…　鈴木さん
健常者と一緒に仕事ができたら　市長

市長　福祉作業所が今の程度じゃなくてね。この前、テレビを見ていたら岡山県の電器メーカーが、工場を造り住宅をはりつけて、そこに通って生計を立てているケースがありました、大事なことだと思いますけど。

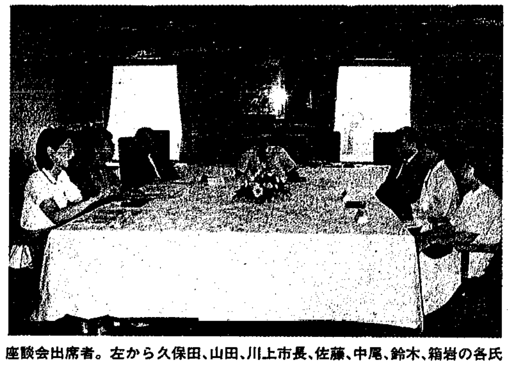
鈴木　その場合も、いろいろな障害者が一緒になってね。

市長　結局、健常者も一緒になって仕事をしていますねえ。新潟でも生まれてくるといいわけですね。障害の程度によって必ずやれることがあるわけですから、それを引き出して、いわば社会参加というか、生計を一〇〇%維持するわけにはいかないが、それでも、何とか生計が維持できる。不足分は国家なりで援助するとか、そういうシステムが生まれてこなければいけないと思ってますけどね。

鈴木　私は、社会とかお役所ばっかりに頼るんじゃなくて、自分でできる範囲内では自分でやって…。私は施設に入れることには、反対なんです。それで日和山作業所にお願いしました。

市長　最初お話しの、普通の小学校の方に入れた、ということですが、養護学校じゃなくて普通の学校の子供たちと一緒に学ばせたことがよかった、とおっしゃった。それがいいという程度の障害の場合は問題ないが…。だけどね、一切が普通の学校、他の子供と一緒にやるんだ、こういう画一的なやりかたってのはどういうもんかなあとね。養護学校に入れることが差別だと反対する人たちもいるけどね。

鈴木　私は自分の子供の程度よりも、ちょっと一段上の所に教えていただくという条件でこれまできました。



座談会出席者。左から久保田、山田、川上市長、佐藤、中尾、鈴木、箱岩の各氏

何んでもやってみよう　中尾さん
人に頼りきっちゃ"ダメ"　佐藤さん

市長　さっきの箱岩さんの話は大事だなあ。手話の人がみんなやってくれるだろうという甘えを箱岩さんは捨てたわけだ。すばらしいね。

我々は障害者対策を立てるとき、まず、障害者自身が自分たちの力を出しきることを前提にして、行政や一般社会が力を貸す——それが基本じゃないかと言ってるんですよ。今の箱岩さんの話を聞いていて、やっぱりこのことが正しいんだと思いましたね。人に頼りきっちゃだめですよ。

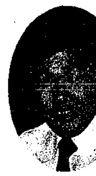
佐藤　同感です。私は、六年間車イスに乗っていて、あの不便さを痛感しました。乗っている時は、あれほど楽なものはない。何も汗水たらして、足が痛い思いをして、杖で歩く必要はない。けれど、車イスじゃ、一歩外へ出てジャリ道に入ったら、全く動きがとれない。

だから、私は「絶対歩く、歩く」とがんばった。それが今に至っているわけです。

山田　中尾さんも、そういう甘えを捨てるというアドバイスはありませんか。

中尾　人間というのは、必要に迫られればどんなことでもできると思います。それを引き出す方法を、行政の側から考えてほしいですね。

それと、何でもやってみるということが必要だと思います。特に視覚障害者の考え方というのは、どうも引っ込み思案で困ってるんです。なにかの会があっても、再三言わないと腰を上げてくれない。



市内には、三千人の視覚障害者がいると聞いていますが活動に参加したり、会に入っている人は、三百人足らず。もっと積極的になってほしいですね。

山田　市長さんもおられるし、この際ですよ、何かない?

中尾　交差点あたりの横断歩道を降りる所ですとか、目じるしになる部分ですね。そういった所を段を切り下げて点字ブロックを敷いていただくと、非常に歩きやすいし、地理を覚えるのに楽なんです。

もう一つ気になるのは信号機なんですよね。まだ「東西南北」がわかりにくい。あれは決まっているんですよね。"カッコウ"が西、"ピヨピヨ"が東とかね。統一がされていません。まずは、付けていただくことが先決だと思いますけども。だいぶ、新潟市の町も歩きやすくなりましたねえ。

山田　市長さん、私たちが気がつかない点がたくさんありますね。例えば中尾さんの信号機、段差にしても言っていただかねばわからないですよね。

佐藤　障害の程度の幅がものすごくあると思います。聞くことも見ることもできるが、逆に片足を切断して寝たきりのままとか。

市長　ひとくちに障害者対策なんて言うけど、中身が広いし、ひとつのことをやれば全部共通だというのもあまりない。みんなそれぞれ条件が違いますからね。難しいですよ。

それと、国際障害者年を大きなきっかけとして、いい方にどんどん伸びていくようにね。今年一年でやめるなんてことはしませんよ。むしろ今年から始まると考えてね。まず、みんながわかってくれるようにしなきゃ。障害者の方々も、自分たちの意志で「がんばろう」という気持ちを起こしてもらわなきゃダメだし、そこから始まっていくんだと。

"耳の不自由な人のために"と手話を学ぶ人たち

山田　箱岩さん。何かご注文ない?

箱岩　私たちの希望なんですけれど、札幌にある百円ケーキの店を新潟にも造ってもらいたいです。

将来の抱負
100円ケーキの店を新潟にも　箱岩さん
点字の出版所を　中尾さん

山田　ああ、あのケーキ屋さん。私行きました。普通のケーキより小さめで、全部一個百円。数えやすいでしょ。

お菓子屋さんのアイデアでできたそうで、いくつかの支店があって、いろいろな障害を持っている方たちが働いているんです。

箱岩さん。いいわね。そういうお店があったら。

市長　そうだな。これは、ボランティアビューローで具体的に検討してもらおうか。

箱岩　それから、テレビに字幕を入れてほしいです。

市長　それは、NHKの方でも、いろいろと検討しているようだ。

ボランティアの皆さんも一生懸命やってくれてるね。本当にありがたい。

中尾　社会福祉センターができたおかげで、ボランティアの方たちと接触できるようになったということは、すごい収穫でした。それがあったからこそ、電話帳もできたし福祉地図もできた。お互いにどんどん交流を深めていけばもっともっとすばらしい活動が展開されていくと思います。

山田　実は、五月二十日から二十二日まで、国立婦人教育会館で、ボランティア活動の全国大会があったんです。北は北海道から、南は沖縄までいらっしゃいましたが、皆さんが、「おたくはいいですね。ボランティアビューローがあって」とおっしゃるんです。そして、ボランティアグループが、ズラッと並んだ一覧表をお見せしたら、もうびっくりしちゃって。皆さんが一生懸命やっているおかげで、私なんかいい思いをして帰ってきました。(笑い)

ここ三年くらい、ボランティアの意識が変わってきましたね。初めは、人さまのお役に立とうと思って入るんです。でも、やっているうちに、なんのことはない、それが結局自分の勉強になっている。私も含めて、ボランティアの皆さんが、そういうことをわかりつつあると思います。

市長　そうだね。

山田　ええ。だから、ボランティアの輪は、大丈夫広がっていくと思います。

山田　では、最後に、これからの抱負をひとことずつお聞きして、会を終わらせたいと思います。まず、佐藤さん。

佐藤　私は障害者ですが、早く店を大きくして、市民として社会の役に立つように、そして、生計も立てれるようにと、毎日やっています。

中尾　仕事はもちろんですが、将来、新潟に点字の出版所を造りたいんです。とにかく情報が不足してるんです。ボランティアの方から造ってもらうことも大事ですが、限りがあります。情報をスムーズに流すために、何とかしたいです。これが夢です。

鈴木　皆さんにご迷惑をかけないで、兄弟などのちょっとした援助をもとに、本人の力で生活できたら幸いだと思っています。親としてがんばらなくてはいけないと。

箱岩　今までやってきたように、一日一日を大切にして生きていきたいと思います。

山田　すてきな恋人ほしくない?

箱岩　今は別にほしくはありません。(笑い)

山田　いつかめぐり合うかもしれませんわね。みんなで応援しましょう。

どうも長い間、ありがとうございました。私も今日この会に出させていただいて本当に"知る"ということは、まず"ふれあう"ことだ、ということがよくわかりました。これからも、皆さんがんばってください。